様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ９ 月　 １ 日現在

機関番号：３４３０７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５７７００８０

研究課題名（和文）江戸川乱歩旧蔵書の書誌調査

研究課題名（英文）The Reseach of Edogawa Ranpo's Old Library

研究代表者
望月　和歌子（宮本和歌子）（MIYAMOTO, Wakako）

京都光華女子大学・キャリア形成学部・講師

研究者番号：６０６３８１９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：江戸川乱歩が創作の着想を得た書籍について調査を行った。その過程で、乱歩が「屋根裏の散歩者」を完成させた、彼の父親が晩年に癌の療養のために籠った場所の特定に至った。さらに、乱歩の父親に治療を施していた行者の名や没年、墓所、宗旨やその地での活動状況の詳細を明らかにした。この成果は2017年秋に公表が決定しているが、江戸川乱歩研究以上に、歴史的文献史料や聞き取り調査に拠ることが主であった修験道の実証的研究に対して新たな研究手法の可能性を提示したとして高く評価されている。

研究成果の概要（英文）：I researched Edogawaranpo's old llibrary. In this process, I found where Ranpo finished his short story Yaneura no Sanposha. In this place, once a Yamabushi took care of cancer patient or eye deseases or others. I reseached about this Yamabushi how he lived in this place, how he cared many troubled people. These fruit will be publish on October 2017.

研究分野：日本近代文学

キーワード：日本近代文学　修験道　民俗学

１．研究開始当初の背景

大正から昭和に活躍した江戸川乱歩は高い知名度を誇る作家といえるが、知名度に比して学術的研究はほとんどなされていない。在野において研究を行う者もいないわけではないが、推理小説愛好家としてのアプローチがほとんどであるために内容が欧米や日本国内のミステリー作品関係に大きく偏っていた。

過去に乱歩の旧蔵書を調査しリスト化したものは存在しているものの、それは国内外の探偵小説書に重点が置かれており、和漢古書籍に関しては書名の読みにも誤りが多く、改善点が多く存在するものであった。

対して、乱歩の旧蔵書に関して国文学上の希少な書籍も少なからず存在し、中には乱歩所蔵の書籍を原本として複製本が刊行されたものも存在している。乱歩の旧蔵書については、探偵小説への関心から探偵小説書ばかりに重点が置かれてきたが、むしろ希少な和漢古書籍の発掘、保持という観点からより一層の調査が行われるべきものであったのである。

このような状況において、江戸川乱歩がかつて蒐集、保存していた書籍のうち、その価値があまり重視されてこなかった和漢籍について精査を行うことを第一の目的とし、日本の創作探偵小説の祖と目されている江戸川乱歩を探偵小説家としての枠組みから外して、明治、大正、昭和という時代の変化を体験した人物の知識の足跡を明らかにしようと考えた。

２．研究の目的

江戸川乱歩がどのような知識、教養の基盤の上に創作活動を行っていたのか。彼の旧蔵書を調査して、江戸川乱歩の創作にはミステリー関連だけでなく日本や諸外国の古典文学作品から得た知識が駆使されていることを明らかにする。

乱歩旧蔵書の和漢籍リスト作成と並行して、乱歩の創作活動において過去に盛んに論じられてきた他の探偵小説家からの影響ではなく、日本だけではなく中国や欧米の古典的教養の知識がどれほど創作に反映されているかを追究し、乱歩の創作アイディア源とは探偵小説のみにとどまらないことの立証を目指していた。

最終目的としては、彼の旧蔵書のうちその重要性がさほど顧慮されていなかった和漢書の目録を作成することを予定していた。

３．研究の方法

適宜江戸川乱歩の旧蔵書を参照し、乱歩の作品の典拠とされたであろう書籍を探究する。一つの作品を書き上げるにあたり、当該書籍が典拠となった理由を作品の内容、当時の作者の状況など多角的に考察し、知識の吸収源や教養の背景を探る。

彼の残した随筆や小説に残されている、過去の様々な書物の知識を改めて拾い上げ、乱歩が生きた時代にその書籍をどこで入手したか、乱歩はいつ、どこで、どのような版でその書籍を手に取っていたと考えられるのか、旧蔵書を参考にしながら探ってゆく。

今回は、作家生活初期すなわち大正12年から昭和初期頃の作品、「赤い部屋」や「人間椅子」などや、作家デビュー前の大学生時代に書いた叙事詩を取り上げ、諸評論などを参照しつつ材源の考証やエロ・グロ・ナンセンスと称されてきた評価についての再考を行った。

また、デビュー三年目にあたる大正14年の諸作品の検証から、実父繁男に対する反抗心や幼少期に抱いていた恐怖心の残滓が作中に頻繁に反映されていることが判明した。そのため、乱歩の実父繁男の死の前後である大正14年夏頃に執筆・発表された作品や随筆、手記を精査し、大正14年に執筆、発表したもののその完成地を乱歩が明かしていなかった「屋根裏の散歩者」について、完成させた場所を明らかにした。次いで、「屋根裏の散歩者」完成は繁男が瀕死の床に就いている傍らであったことから、作品自体が父親の死の記憶を鮮烈によみがえらせるものとなり、乱歩にとっては好ましくない印象の作品となっていたことを論証した。

４．研究成果

後述の「主な発表論文等」①において、「人間椅子」という作品は変態的嗜好と白人への憧憬、日本への回帰を表したものとするアメリカの研究者の論説を例に取り上げ、変態的嗜好というよりも多様な認知手法を取り入れることを提起した作品であることを示した。③では①の内容を受け、発表当時から現代まで根強く指摘される変態性欲、エロ・グロ、ナンセンスという作品評価とは、作者が問題視していた一面的な認知手法に起因する

ことを指摘した。
②では、谷崎潤一郎の短編からヒントを得たとされている「赤い部屋」について、宇野浩二の童話、H．G．ウェルズの短編作品からの影響を検証し、全て作り話であったとする結末と、種明かしされたことによって赤く無気味であった部屋の印象が一変して描かれていることについての整合性が認められることを論じた。
④では、江戸川乱歩が編み出した有名なキャラクターの一つである怪人五十面相について、匿名性の保持から正体を論じた。日本国内外を問わず、本名を知られることは相手への服従を意味するという思想が存在していたこと、したがって本名を知られないようにすることが重要視されていたことから、怪人二十面相も本名を隠し変装によって他人になりすます役者のような存在で、正体が誰であるかはさほど意味を持たないことを論じた。
乱歩大学時代の創作を取り上げた「主な発表論文等」⑤では、題材としたジャンヌ・ダルクについてどのような書籍、史料に依拠していたのか、明治時代の教科書や伝記を精査し考証を行った。その結果、『女学世界』第一巻第二号（明治三四年二月）、第一巻第三号（明治三四年三月）に掲載された中内蝶二による伝記「惹安達克」に加筆し、世界歴史譚シリーズの一つとして刊行した中内蝶二著『惹安達克（じゃんぬだるく）』（明治三四年一二月博文館、世界歴史譚第参拾弐編）に細部を依拠し、「オルレアンの少女」という長詩を創作していたことが判明した。加えて、明治時代から多数存在していたジャンヌ・ダルク伝のなかでも特にこの書を取り上げた理由としては、信仰心の篤さや孝行に焦点を当てていない点に惹かれたためであろうことを考察した。
⑥においては、江戸川乱歩の専業作家活動は、彼の父親の死去を待つかのようにして開始されていたことを明らかにした。乱歩の父親の死去前後に書かれた作品には、父親との関係に悩む息子および父親の無残な死が頻繁に登場しているが、まさに執筆当時の作者自身の心境の投影であった可能性が高いことを、乱歩の随筆、回想録から証明した。
それらの研究過程において、乱歩の専業作家一年目である大正 14 年、乱歩の父親が癌の治癒を目的として参籠していた「三重の山奥」がどこであるかの特定に成功した。繰り返し現地調査を行い、乱歩の父親が傾倒していた「白衣の行者」の氏名や没年、墓所を明らかにしたほか、その地において「白衣の行者」が住民の篤い支持を得ていたことや、既存の寺院と良好な関係で共存していたことを明らかにした。これは、「主な発表論文等」⑦で詳述している。
その地は、江戸時代には東海道の名所として知られ、葛飾北斎や歌川広重といった著名な浮世絵師も題材として取り上げ旅人に親しまれた場所であった。東海道を徒歩で旅行する客が減ったことから衰退し荒廃していたが、大正時代に入って偶然到来しその地を再興した人物が、乱歩の父親が傾倒した行者であったことが判明したのである。この人物の存在を伝える記録はほとんどなく、現時点で言及を確認できている史料はわずか二点のみであり今後の深い調査には、現地における聞き取り調査が重要となるであろうと予測される。
文学史料を論拠として現地調査を展開し過去に実在した行者や、忘れられた地となりつつあった小さな宗教施設の存在を明らかにしたこの成果は、文献資料や聞き取り調査に依拠して研究を展開する手法が中心であった修験道の実証的研究に対して新たな研究手法の可能性を提示すると評価され、日本山岳修験学会誌『山岳修験』への採録が決定している。乱歩が「屋根裏の散歩者」を完成させた場所の探求が江戸時代に隆盛を誇った旧名所の再発見、大正期にそこで活動していた行者の存在の発掘は、近代文学資料が宗教学や民俗学、郷土史学において実証的価値を持つことの実証例となったということは、従来修験道研究において近代文学資料はほとんど活用できないと考えられてきた通念を覆し、昭和期に入っても前近代的な行者が人々の信頼を集めカリスマ性を発揮していたことの実例とともに大きなインパクトを与えたとして、『山岳修験』採録にあたっても高く評価されている。
この成果を踏まえて、乱歩の父親が参籠した「三重の山奥」がたどってきた盛衰の歴史の研究、当該地の現況に関する研究を今後予定している。
今回の助成において得られた最大の成果は、当初予定していた乱歩旧蔵書中の和漢籍リスト作成ではなく、乱歩の実父が病気治療のため滞在した場所が判明し、そこで治療としての祈祷を施していた人物が、当時すでに珍しいものとなりつつあった行者しいものとなりつつあった行者であったことを解き明かしたことにあると考える。

加えて、乱歩の執筆環境を探るために、現在では忘れ去られた場所となっていた乱歩の実父の療養地に赴いて調査し、歌川広重の浮世絵に描かれた光景との異同を発見した。このことは、歌川広重は実際に東海道を旅しながら東海道五十三次図を描いたのかどうかといういまだ説の定まらない問題についても、一つの手掛かりを与えるであろう内容であった。近代文学という分野にとどまらず、歴史学や近世文化史、修験道史研究においても大いに活用、貢献しうる発見となり、助成を受けた意義は大きかったものと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　7　件）

①日本国外における江戸川乱歩作品解釈の一例　―コネチカット大学マーク・シルバーの「人間椅子」論　2015年7月『ミステリーズ！』第72号　東京創元社　ｐｐ105-109　査読無　宮本和歌子

②江戸川乱歩「赤い部屋」の背景　―谷崎潤一郎、宇野浩二、H.G.ウェルズ―　2015年8月　『ユリイカ』第47巻11号　青土社　ｐｐ185-192　査読無　宮本和歌子

③江戸川乱歩「人間椅子」論　―エログロという評価と心理的盲点―　2016年3月　『国文学論叢』第35巻　京都大学文学部国語学国文学研究室編　ｐｐ103-112　査読有　宮本和歌子
http://hdl.handle.net/2433/210387

④怪人二十面相論　2016年9月　『国文学論叢』第36巻　京都大学文学部国語学国文学研究室編　ｐｐ67-79　査読有　宮本和歌子
http://hdl.handle.net/2433/217034

⑤素人時代の江戸川乱歩作「長詩　オルレアンの少女」について　2016年12月　『京都光華女子大学／京都光華女子大学短期大学部研究紀要』第54号　京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部　ｐｐ17-23　査読無　宮本和歌子
http://id.nii.ac.jp/1108/00000794/

⑥大正14年の江戸川乱歩　2017年3月　『国文学論叢』第37巻　京都大学文学部国語学国文学研究室編　査読有　ｐｐ29-38　宮本和歌子
http://hdl.handle.net/2433/222642

⑦三重県亀山市関町旧坂下村岩屋観音の石川竹四郎　―江戸川乱歩「屋根裏の散歩者」完成の地と「白衣の行者」―　2017年10月　『山岳修験』第60号　日本山岳修験学会　査読有　宮本和歌子

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計0　　件）

〔産業財産権〕
該当なし

○出願状況（計0　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
該当なし

６．研究組織
(1)研究代表者
宮本　和歌子（MIYAMOTO, Wakako）

京都光華女子大学キャリア形成学部　講師

研究者番号：60638196

(2)研究分担者
（　　）
該当者なし

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

該当者なし

研究者番号：

(4)研究協力者

(　　)

該当者なし